吐蕃のルと千戸

岩　尾　一　史

はじめに
1章　チベット語文獻よりみたル制
1　先行研究と資料狀況
2　各書の關係
3　リストの相違とル制の變化
2章　中央アジア出土資料よりみたル制
1　中央アジアにおけるル
2　中央アジアにおける千戸
3　千戸と4人隊
今後の展望

はじめに

現在チベットの中央地域であるウ・ツァン地方を表すのに，4ル ru bzhi[1] という呼稱がある。その內譯は，ウの北側に中ル dbu ru，南側に左ル g-yo ru，ツァンの北側に右ル g-yas ru，南側に支ル ru lag であり，現在では單に地方を表すのに使われるのみだが，起源は吐蕃時代，軍事行政組織としてソンツェン・ガムポの頃に端を發する。

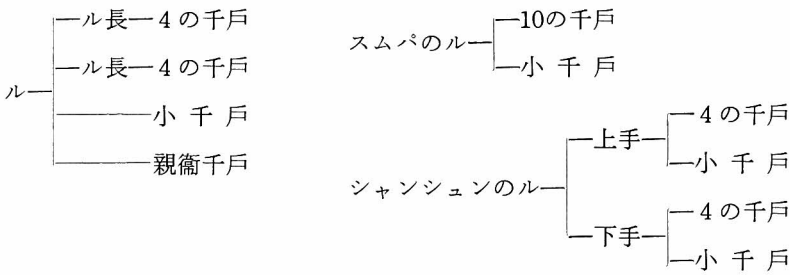
ある傳承によると吐蕃時代のル制とは次のような組織であった。つまり，1ルの內には8つの千戸 stong sde[2] と1つの小千戸 stong bu chung[3]，そして

(1) ルとは本來「角(つの)」という意である。日本においては「翼」と意譯されてきたが，研究者が北方遊牧國家の制度との類似から取りあえず附けたものであって，この意譯にはそれ程根據があるわけではなく，むしろル制の本質を見誤る懼れさえある。歐米語圈ではそのまま“horn”とするし，中國語でも音譯「茹」を使っており，今筆者も「ル」と音譯するのみにした。

(2) 吐蕃中央のトンデ stong sde がいわゆる「千戸」なのか，それとも「千人隊」なのかは長年の問題であり，今「千戸」と譯することに，直接の證據が有るわけではない。トン stong はチベット語では「千」を意味するのではあるが，デ sde は「集まり」といった意味でしかないのである。ただ吐蕃支配期の敦煌において漢人により組

1つの親衛千戸 sku srung gi stong sdeがある。さらに千戸は4つづつに分けられ，それぞれをル長が管理する。4ルの他にも今や地名としては残ってはいないが，現在アムド地方にスムパのル sum pa'i ru(4)，ガリ地方にシャンシュンのル zhang zhung gi ru があった。

各ルはそれぞれ固有の馬，旗，告身等を有し，あたかも一個の軍隊であるか



＊BLON, DPA'-BO, LDE'U1 による。

織されたトンデは，文字通り千の戸であることは武内紹人氏により明らかにされた（武内 1994)。つまり，1つのトンデ内には，ツェン tshan（漢文文書では「將」）と呼ばれる組織が約20あり，そして1ツェンの内には約50の戸が屬している。そうすると，1トンデには千の戸が含まれていることになり，文字通り「千戸」なわけである。問題はこのような組織形態が吐蕃中央のトンデにも當てはまるかだが，氏も言うようにツェンという組織は中國起源ではなく吐蕃起源のものであるようで，そうすると中央のトンデも同様の組織だったのではないかと考えられるのである。

(3) 實體は不明。BLON では千戸の半分と數えており（ff. 15a4-5)，そうすると實質500戸であったということか。ただし中央アジア出土文書にも吐蕃中央では小千戸だった筈のものも現れるが（例：ナクショー，スムパのル所屬)，普通の千戸と何ら相違はない。

(4) スムパのル sum pa'i ru，特にスムパ sum pa の解釋については，スムパ族を指すという説（例えば Uray 1960 p. 53）と，山口瑞鳳氏のように「3番目」という意味であるとする説（山口 1968 p. 37 n. 24，また山口『吐國研』pp. 867-870 に概述）がある。兩説の論爭については『吐國研』pp. 867-870 に詳しいが，かいつまんで言うと，山口氏は，スムパ族はスムパのルの置かれたアムド地方ではなく，元來は四川の金川地方に居たとし，sum pa はスムパ族のことではなく，「3」という意味で捉え，更に DPA'-BO に載る形 yan lag gsum pa'i ru より，支部翼 ru lag に嗣ぐ第三番目の翼つまり「支部第三翼」という譯をつけたのである。

今，筆者にはどちらの説が正しいのか斷ずる根據はない。ただ，yan lag gsum pa'i ru という形は DPA'-BO のみにしかなく，DPA'-BO の原資料である筈の LDE'U1（後述）にもない。また NEL-PA を見るに，「スムパの地域には千戸が8つで，」sum pa'i yul la stong sde brgyad ste（p. 52 2a6）とあり，續けてスムパのルに屬する千戸を列擧している。この記述による限り，スムパは山口氏のいうような數詞ではなく，むしろ固有名詞であるようだ。山口譯を採用しない所以である。

のように記されている[5]。この制度が吐蕃の國家制度の中核であったことは十分豫想されることで，多くの學者が研究を重ねてきた[6]。しかしそれにも關わらず，遊牧國家的制度との關係が指摘されるに留まり，ル制が實際にはどのように機能していたのか，特に軍事組織としての機能については，いまだ明確になっていない。ル制がいわゆる遊牧國家的制度を基調としているのは誤りではなかろうが，チベット高原は峽谷，山脈が入組む高地であり，かつ農耕地帶，放牧地帶が入り交じり[7]，北方の草原地帶とは狀況が異なる。このような狀況の下，ル制は獨自の發展をした筈である。ル制の實態を明らかにするには，遊牧國家的制度とは一旦引き離して考える必要があるだろう。

本稿の目的は，まさにこのル制の實態について考察することにある。アプローチの方向は，大きく次の２つに分けられる。

まず，吐蕃崩壞後に成立したチベット語文獻からル制を考察する。特に80年代に入ってから相當數の文獻が新たに發見・出版されており，ル制に關する情報は以前より豐富になっている。ル制を知る上で，チベット語文獻は基盤であり，最もまとまった情報を載せる。しかしながら後述の通りそれらを利用した研究は少なく，またその成果も必ずしも妥當とはいえない。まず各資料の情報を整理し直し，分析を加えることが必要である。

次に，出土資料からル制について考察する。ミーラーン Mīrān，マザールターク Mazār Tāgh にある吐蕃の砦跡が今世紀初頭よりスタイン他により調査され，多くのチベット語文書が發見されていることは周知の通りである。それらは多くは斷片であるとはいえ，砦跡という條件のもと，軍事組織であるル制と密接に關係するものが少なからずある。管見の限り，それらをル制という

(5) この部分についてはトーマス氏による BLON の英譯がある（Thomas, *TLTD1* pp. 277-278)。また，佐藤氏はこのルの特徴を述べる部分の內，ル毎に馬の毛色が統一されていることに注目し，匈奴の軍隊との類似を指摘している（佐藤『古チ研』p. 757)。

(6) ル制に關する先行研究のうち主要なもののみ擧げると，ル制の紹介・遊牧民組織との類似の指摘〔*TLTD1* pp. 276-286, Tucci, *TPS* pp. 737-738,『古チ研』pp. 750-757〕，ル制の成立過程について〔Uray 1960,『吐國研』pp. 860-87, Uebach 1985, NEL-PA pp. 19-24〕，各ル，千戶の位置比定〔Tucci, *PRT* pp. 77-90,『チ歷研』pp. 347-379,『吐國研』pp. 824-860〕などがある。

(7) チベットの地理については，栗田 1987參照。

角度から分析した研究は，今まで無い。しかしこれら資料群を分析することにより，軍事的機能という側面に限定されるものの，従來では解明しえなかったル制の一端を解明する糸口に成り得るはずなのである。

以下，1章ではまず後代チベット語文獻にみえるル制について整理し，2章では出土資料を中心に考察を進めたい。

1章　チベット語文獻よりみたル制

1　先行研究と資料狀況

ル制について詳しい情報を載せるチベット語の文獻には，現在次の5種類がある。すなわち，

LDE'U1　mkhas pa lde'u, *rgya bod kyi chos 'byung rgyas pa*『デウ佛教史(1)』1261年以降成立。

LDE'U2　lde'u jo sras, *chos 'byung chen mo bstan pa'i rgyal mtshan*『デウ佛教史(2)』13世紀中頃？成立。

NEL-PA　nel pa paṇḍita, *me tog phreng ba*『蓮花華蔓』1283年成立。

BLON　o rgyan glim pa (gter ston), *blon po bka'i thang yig*『大臣遺教』（*bka' thang sde lnga*『五部遺教』所收）14世紀後半成立。

DPA'-BO　dpa' bo gtsug rag phreng ba, *chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*『賢者の喜宴』1545—1564年成立。

の5書である[8]。ただ，この5書全てが出そろったのは1987年以降のことで，當初より知られていたわけではない。

BLONにル制についての情報が載ることは，トーマス氏 Thomas, Fredelick W. の紹介により比較的早くから知られていた[9]。また DPA'-BO は元來稀覯本であったというが，古代チベット史の章（Ja）は幸い影印版が1962年に出版されており，研究に利用されるようになった。この2つのリストはそれぞれ異

(8)　各書についてのより簡便な情報は，Martin, D., *Tibetan Histories* pp. 43–44, 46, 53, 88 参照。

(9)　*TLTD1* pp. 276–286

同があるものの，1つのルに8つの千戸という原則に基づいた，安定した形を傳えている。また，ルの構造，各ルの特徴についての情報をも載せており，ル制を知る上で重要な情報を含んでいる。兩書は先行研究においての基本文獻であり，トゥッチ Tucci 氏（*PRT*），佐藤氏（『チ歴研』）や山口氏（『吐國研』）等，主要なル制研究は，兩書に載るリストを比較したものであった。

しかし，1985年にウーバッハ氏が NEL-PA にのる千戸のリストについて發表し（Uebach 1985），ル制研究は新たな局面を迎えた。というのは，先の2書では各ルに屬する千戸數が8つであるのに對し，NEL-PA のリストでは中ルでは12，右ルでは6という具合にアンバランスな數の千戸を擧げているのである。不安定な形のリストは，安定型のリストによっていた從來の靜的とも言えるル制像を，大きく變えることとなった。

また1987年，LDE'U1，LDE'U2 がラサより活字版にて出版されたが，ウーバッハ氏は2書の概要を紹介し，併せてこの2書にもリスト（しかも異なる系統のもの）が載っていることを紹介した。似た名の著者（デウケーパ lde'u mkhas pa，デウジョセー lde'u jo sras）や，同じようなタイトル(10)（LDE'U1：『廣デウ佛教史』lde'u chos 'byung rgyas pa，LDE'U 2：『デウ佛教史』lde'u chos 'byung）が附けられているにも關わらず，兩書のル制に關する情報は異なる。千戸リストに關していえば，LDE'U1 は DPA'-BO に，LDE'U2 は NEL-PA に似たリストを持っており，不安定な形をもつリストがまたもや現れたことになる。

以上が現在知られる5種類の書である。上述の通り，BLON，DPA'-BO の比較については既に幾人かの研究があるのだが，その他の書も含めて比較檢討したのは管見の限りウーバッハ氏しかいない。氏の論說は大凡においては首肯し得るものであるが，細部においては贊成できない部分もあり，修正が必要である。また未だ明確でない部分もあるので，以下，まず各書の情報がどのような關係にあるのか確認し，次いで各情報の相違について檢討したい。

---

(10) より正確には奥附のタイトルが似ているのであり，表紙のタイトルは異なっている（略號表參照）。なお，LDE'U2 の參照には京都大學文學部御牧克己教授の格別のご配慮を賜った。ここに記して謝したい。

2 各書の關係

ル制についての情報は，大まかに言えば各ルの境界を述べる部分，各ルに屬する千戸を羅列する部分と，各ルの特徴（各ルのル長，馬の色，旗印などの描寫）を述べる部分に分けられるが，5書全てに情報が完備しているわけではなく，次のような次第になっている。

	LDE'U1 (pp. 258-261)	DPA'-BO (ff. 19a6-20b1)	LDE'U2 (pp. 110-111)	NEL-PA (pp. 50-54)	BLON (ff. 8a5-9b4)
ルの境界	○	○	○	×	×
千戸のリスト	○	○	○	○	○*
ルの特徴	○	○	×	×	○*

*後述

ルの境界，ルの特徴の部分については，LDE'U1，DPA'-BO，LDE'U2 BLON の3書とも基本的に大きな異同はないのだが，千戸のリストに關してはかなりの異同があり，問題を殘しているので，中心にすえ，各書の關係について檢討したい。

まず，問題の5書の千戸リストを一覽にしてみる（**表1**）。以下の議論については，**表1**を參考にされたい。

① LDE'U1 と DPA'-BO

この2書がル制に關しては類似した內容をもつことは，既にウーバッハ氏が指摘するとおりである(11)。氏は，DPA'-BO，Ja 章（古代チベット史の章）の末尾の引書目錄中にある書『デ大師の佛教史』lde ston gyi chos 'byung(12) が，まさに LDE'U1 そのものであるとする。確かに**表1**より明らかな通り，DPA'-BO と LDE'U1 が擧げる千戸はよく似ている。例えば，シャンシュンのルやスムパのルに關しては，ほとんど同じ千戸を擧げているし，他のルの千戸も綴りの異同や誤寫等を除けば，ほぼ一致しているといっても良い。また，先述の通りその他のル關係の記事は內容的に一致する。DPA'-BO のリストが LDE'U1 を元にして作られていることは間違いないだろう。

(11) Uebach 1992 p. 830
(12) DPA'-BO 155a1

② LDE'U2 と NEL-PA

ウーバッハ氏は，最近の研究において脚注という形ではあるが，NEL-PA が LDE'U2 を引用したとする[13]。確かに両書とも中ルの千戸數が12，右ルの千戸數が6という不安定型リストであり，また表より明らかなように類似した千戸名を擧げている。従って両書が同種の情報源を元にしていることは疑いないのだが，仔細にみると必ずしも NEL-PA が LDE'U2 を引用したとまではいえないようである。

中ルのチョムパは LDE'U2 では co la，NEL-PA では bcom pa であり，むしろ NEL-PA の方が他のリストに載る形に近い。中ルのディンツァムについても，'bri te (LDE'U2)，'bring 'tshams (NEL-PA) とあり，やはり NEL-PA の方が他のリストにより近い。この様な例は他にも，左ルのヤルギャン mang rgyal (LDE'U2) -yar rkyangs (NEL-PA) が擧げられよう。また，両者が全く異なる千戸を擧げている場合もある。例えば右ルでは，gshang lha (LDE'U2) -'o chab (NEL-PA)，左ルでは khri'u (LDE'U2) -nyag nyi (NEL-PA) などである。いずれの場合も，NEL-PA の方が他リストに似ていることは明らかであるし，また NEL-PA より LDE'U2 の方がむしろより崩れた形をしていることが分かる。そもそも，スムパのル所屬の千戸は，LDE'U2 では全く缺落しているにも關わらず，NEL-PA には記載されている。もし，LDE'U2 を NEL-PA が引用したとすれば，スムパのルについての情報はどこから得たのか不明となろう。以上より，両書はもとをたどれば情報源を同じくするのであろうが，NEL-PA が LDE'U2 を直接引用しているとは考えられないのである。

③ BLON

このリストはルごとの千戸數は均等であり，その點 LDE'U1，DPA'-BO と共通しているのだが，それらと必ずしも同類でないことは，中ル，左ルの千戸が記載される順が異なることよりわかる。このリストは他のように千戸をルごとに羅列するような形式でなく，各ルの特徴が語られるうちに混入して述べられており，しかも各千戸を支配する氏族名が附け加えられている。各ルの特徴

(13) Uebach 1999 p. 267 n. 27

表1　軍の千戸一覧表

ル	千戸の名称	LDE'U1		DPA'-BO		LDE'U2		NEL-PA		BLON		出土資料
中ル(dbu ru)	ドルテ	dor ste	1	dor sde	1	dor sde	1	dor te	1	dor de	5	dor te
	テゾム	sde mtshams	2	sde mtshams	2	ste 'dzom	3	stong 'jim	3	ste 'dzem	6	ste 'jom
	チュクツァム	phyug 'tshams	3	phyugs mtshams	3	phyur 'tshams	2	chugs 'tshams	2	phyug mtshams	2	pyug tshams
	ダンツァム	'grangs 'tshams	4	'brang mtshams	4	'grangs	11	'grams tsha	5			
	チョムパ	gcong pa	5	com pa	5	co la	5	bcom pa	7	bcom pa	3	gcom pa
	ディンツァム	'bring 'tshams	6	'bri mtshams	6	bri te	4	'bring 'tshams	4	'bring mtshams	1	
	上手キィ	kyi stod	7	skyid stod	7	kyi stod	7	skyi stod	9	skyid stod	7	skyi stod
	下手キィ	kyi smad	8	skyid smad	8	kyi smad	8	skyi smad	10	skyid smad	8	
	ゾムテン/ゾテン					zo stengs	6	gzo steng	8	zom steng	4	
	ポーカル					phor kha	9	phod dkar	11			phod kar
	ガムルパク					ngam ru phag	10	ngam ru'i phag	12			ngam ru pag
	ニェンカル					nyen khar	12	nyer kar	6			nyen kar/nen kar
	イェルラブ/小千戸	yel rabs	9	yel rab	9	spel zhabs	13	spel zhabs	13	yel zhabs	9	
左ル(g-yo ru)	ヤルルン	yar lung	1	yar lung	1					yar klungs	1	
	チンルン	'ching lung	2	'phying lung	2					phyi lung	2	
	ヤルキャン	yar rgyang	3	yar mtshams	3			yar rkyangs	4	ljang kyang	3	yar skyang/g-yar skyang
	ユバン/ユムバン	yung nga	4	g-yu 'bangs	4			yum 'bangs	6	lung pa	4	
	ダクポ	dwags po	5	dags po	5	dwags po	8	dags po	8	dags po	8	dags po
	ニャクニ	myag mi	6	nyag nyi	6			nyag nyi	7			
	ニャルパ	dmyal	7	dmyal	7	dmyal	5	dmyal khri	5	gnyal	5	mnyald pa
	ホダク	lho brag	8	lho brag	8	lho 'brog	3	lho brag	3	lho brag	6	lho brag
	シャルポ					shar po	1	shar po	1			
	チボ					sphying ba	2	spyi bo	2			
	マンギャル					mang rgyal	4					
	チウ					khri'u	6					
	ニャンポ					mnyang	7			nyang po	7	
	ロロ小千戸	lo ro	9	lo ro	9	ri bo	9	ri bo	9	ri bo	9	
右ル(g-yas ru)	トヨ/トェヨン/トンチェン	lto yo	1	stong chen	1	stong yong	1	sde spo	1	stod yongs	1	
	シャン／シャンテン	shangs	2	shangs chen	2	shangs stengs	3	shangs stengs	3	shangs steng	2	
	ランミ	lang mi	3	lang mi	3					lang mi	3	lang myi
	ポーカル	phod dkar	4	phod dkar	4					phod dkar	4	phod kar
	ニェンカル	nyen mkhar	5	nyen dkar	5					gnyen dkar	6	nyen kar/nen kar
	ダンツァン	'grangs rtsang	6	'brang mtshams	6					drang mtshams	5	grang brtsan
	イェルラブ	yo rabs	7	spo rab	7					yel rab	7	yel rab
	ゾンデ／ゾムテン	gzong sde	8	gzong sde	8					zom steng	8	
	シャンハ					gshang lha	2					
	オチャブ							'o chab	2			
	ザンポ					bzang por	4	bzangs po	4			
	ドクミ					'bro mi	5	'brog mi	5			
	オミ					'o mi	6	'o mi	6			
	シャン小千戸	shang	9	shangs	9	shangs	7	shangs	7	shangs	9	shang

支ル(ru lag)		マンカル	mang dkar	1	mang kar	1	mang mkhar	5	mang dkar	5	mang gar	1	mang kar
		チボム／チゴム	khri bom	2	khri som	2			khri gong	6	khri dgongs	2	khri boms/khri goms
		ドムパ	sgrom pa	3	grom pa	3	khrom pa	1,6	grom pa	1	grom pa	3	'grom pa
		ハツェ／ハムツォ	lha rtse	4	lha rtse	4	lha 'tshong	2	lha mtsho	2	lha rtse	4	lha mtsho
		ニャンロ	myang ro	5	myang ro	5	mnyang ro	4	nyang ro	4	nyang ro	5	mnyang ro
		チタン	khri thang	6	khri 'thang	6	khri dang	3	khri dang	3	khri tha	6	khri dang
		カルサル	mkhar gsar	7	khad gsar	7							mkhar sar
		ゲーサム	gad sram	8	gang bram	8	gad	8	gad gsum	8	gad bkram	7	gad sram
		カブソ					khab sar	7	khab so	7			
		カルパ									mkhar pa	8	
		ツォンガム小千戸	mtsho ngam	9	mtsho ngos	9	mngal	9	mtsho rta	9	'tshong ma	9	
スムパのル(sum pa'i ru)		ツェトン	rtse mthon	1	rtse mthon	1			rtse 'thon	1			
		ヨトン・ポトン	yo mthon	2	po mthon	2							
		上手ゴーツァン	rgod tshang stod	3	rgod tshang stod	3							rgod tshang stod
		下手ゴーツァン	rgod tshang smad	4	rgod tshang smad	4							rgod tshang smad
		上手ゾム	'dzom stod	5	'jong stod	5			mdzo stod	7			'dzom stod
		下手ゾム	'dzom smad	6	'jong smad	6			mdzo smad	8			'dzom smad
		上手テ	tre stod	7	dre stod	7							
		下手テ	tre smad	8	dre smad	8							tre smad
		カロ	kha ro	9	kha ro	9							kha dro
		カザン	kha bzang	10	kha zangs	10			khang bzangs	4			kha bzangs
		ゴーディン							rgod lding	2			rgod lding
		カンドン							khang grong	3			
		クンネー							kun gnas	5			
		ドラム							mdo ral	6			
		ナクショー小千戸	nag shod	11	nags shod	11			nags shod	9			nag shod
シャンシュンのル(zhang zhung ru)	上手(stod)	オチョバク	'o co bag	1	'o co	1							'o co bag/'o zho bag
		マンマバク	mang ma bag	2	mang ma	2							
		ニェマバク	snye ma bag	3	gnye ma	3							nyi mo bag
		ツァモバク	rtsa mo bag	4	tsa mo	4							
		バガ小千戸	ba ga	5	ba ga	5							
	下手(smad)	グゲ	gug ge	6	gug ge	6							
		グチョク／チョクラ	gu cog	7	cog la	7							
		チルツァン	spyir rtsang	8	spyi gtsang	8							spying rtsang
		ヤルツァン	yar rtsang	9	yar gtsang	9							yang rtsang
		チティ小千戸	spyi ti	10	ci di	10							

＊LDE'U1…pp.258-259
LDE'U2…pp.110-111
NEL-PA…pp.50-55
BLON…f.12b6-15a5
DPA'-BO…f.19b6-20a4
各千戸名の右の数字は各書における記載順を表す

表2　氏族リストの比較

		LDE'U1		BLON	
ル		千戸	氏族	千戸	氏族
支ル	上部	mang dkar	'bro	mang gar	'bro
		khri bom		khri dgongs	
		sgrom pa	sgro	grom pa	'bro
		lha rtse		lha rtse	
	下部	myang ro	'bro	nyang ro	'dre
		khri thang	khyung po	khri tha	khyung po
		gad sram	mgos	gad bkram	'gos
		mkhar gsar	shud ke	mkhar pa	shu gu
	小千戸	mtsho ngam	sgro	'tshong ma	sgro
右ル		lho yo	khyung po	stod yongs	khyung po
		shangs sde		shangs steng	
		lang mi	spa tshab	lang mi	pa tshab
		phod dkar		phod dkar	
		nyen mkhar	lang sa	drang mtshams	rangs pa
		'grangs rtsang		gnyen dkar	
		yo rabs	mgos	yel rab	'gos
		gzong sde		zom steng	
	小千戸	---	---	shangs	ring sle bya
中ル		phyug 'tshams	phyug 'tshams	'bring mtshams	---
		'grangs 'tshams		phyug mtshams	
		gcong pa	cog ro	bcom pa	cog ro
		'bring 'tshams		zom steng	
		dor ste	sma,ska ba	dor de	rma,ka ba
		sde mtshams		ste 'dzem	
		kyi stod	sbas	skyid stod	sbas
		kyi smad		skyid smad	
	小千戸	---	---	yel zhabs	bran ka
左ル		yar lung	snyags,tshes spong	yar klungs	gnyags,tshe spong
		'ching<phying>lung		phyi lung	
		yar rgyangs	sna nam,myang	ljang kyang	myang,sna nam
		yung nga		lung pa	
		dwags po	lho,'chims	gnyal	mchims,snyi ba
		nyag nyi		lho brag	
		dmyal	snyi ba	nyang po	ldong ,mchims
		lho brag		dags po	
	小千戸	---	---	ri bo	sbrang ston

LDE'U1…pp.259-261
BLON… ff.8a5-9b4
記載順に並べている。

の部分に關しては少々の異同はあれ，形式上はほぼ一致するのに對し，千戸の支配氏族についての記事は，DPA'-BO にはない。ウーバッハ氏はこの BLON のリストを LDE'U1-DPA'BO，LDE'U2-NEL-PA に續き3つ目の系統であ

ると考えているようだ[14]。實際，そのようにも區分できるが，それには少々説明が必要である。

先述の通り，LDE'U1，BLON，DPA'-BO は千戸のリスト以外にも各ルの特徴について情報を載せているが，實は LDE'U1 のルの特徴を述べる内にも，再度千戸名を羅列しながら各千戸を統べる氏族について列擧している。BLON に載る千戸リストは，この LDE'U1 の千戸を統べる氏族のリストとよく似ている（**表2**）。例えば，中ルのドルテ千戸は，BLON では5番目に擧げられているが，これは LDE'U1 の氏族リストでも同様であるし，その後のテザム，上手キィ，下手キィとも同様の順で並んでいる。凡そ BLON の千戸リストと LDE'U1 の氏族リストが類似していることは，**表2**を見れば明らかであろう。つまり BLON は，LDE'U1 型の情報を持つ書より，前半の千戸リストを省略し，後半の（支配氏族付き千戸リストと共に）ルの特徴の部分を参考にしたと考えられるのである。なお，DPA'-BO は，千戸リストが重複していると考え，逆に後半の（支配氏族付き）千戸リストを割愛したのであろう。

ただし，BLON が LDE'U1 を直接引用したというわけではないことは，BLON では各ルの小千戸の支配氏族についても載せるが，LDE'U1 には支ルの例を除いては缺落していること，また，各ルの特徴の部分についても，BLON には各ルの人員數を擧げるが[15]，LDE'U1 には缺落していることからもわかる。そこで少なくとも，現行の LDE'U1 を BLON が参考にしたとは考えられない。支配氏族付きのリストを含むルの特徴についての記事に關しては，BLON は，LDE'U1 に類似した内容をもつが，より詳細な情報をもった書を参考にしたと考えられるのである。

以上，各リストの相關關係について，① DPA'-BO の記事は LDE'U1 から引用したものである（ただし，一部省略している），② NEL-PA と LDE'U2 は同種のリストであるが，直接に引用關係が有るわけではない，③ BLON のリ

(14) ibid.

(15) BLON によると，各ルには上手・下手それぞれに35萬人，つまり1ルには併せて70萬人（ただし支ルには上手・下手36萬人，併せて72萬人）の人數が配屬されていたという。

ストは LDE'U1 のル關係記事の後半部分と同種のものである，という3點を確認した。つまり現在確認できるル制の情報は，安定した千戸數とルの特徴を傳える LDE'U1 型と，不安定な千戸數を傳える LDE'U2-NEL-PA 型の2系統に區別できると考えられる。

3　リストの相違とル制の變化

次に，2系統の情報はどのような相違があるのか，またその相違が何によるものか，考えたい。

安定型では右ルに屬する3つの千戸，つまりポーカル，ニェンカル，ゾムテンが，不安定型では中ルに屬している。ウーバッハ氏はこれをルの境界が移動した様子を表していると考える(16)。この他，BLON ではゾムテンが，DPA'-BO ではダンツァムが中ル，右ル兩方に現れることをも考え合わせると，中ル—右ルの閒ではルの境界が移動していたと考えるのは妥當であろう。

恐らく，所屬が移動した千戸は2つのルの境界付近に存在したのだろう。例えばダンツァムは，DPA'-BO では 'brang mtshams として中ル，右ルに同時に登場している。DPA'-BO のもととなった LDE'U1 では，中ルには 'grangs 'tshams，右ルには 'grangs rtsang とある。いずれにしろ，元となった LDE'U1 にも似た千戸が兩ルに同時に現れる。他書をみると，中ルに屬させるもの (NEL-PA: 'grams tsha, LDE'U2: 'grangs)，右ルに屬させるもの (BLON : drang mtshams) があり，中ルと右ルのどちらに所屬するか一定していない(17)。この千戸は中ルと右ルの閒を移動することになったのであろうが，恐らく流傳の過程で2つの異なる千戸と閒違われるようになったのである。佐藤氏の地名比定に據れば，'brang mtshams は漢字表記の董査にあたり，その位置は大體現在のウとツァンの境にあるとのことである(18)。つまり中ルと右ルの境にも近

(16) Uebach1985 pp. 149-150

(17) なお，中央アジア出土資料には，'grang rtsan という千戸が現れており（**表3**參照），つまり，LDE'U1 の右ルに現れる形が最も原型に近いと考えられる。

(18) 『チ歴研』p. 367. 但し，氏は 'brang mtshams (DPA'-BO) という綴りを語釋することにより，ダンツァムをパンチェンラマの道程に現れる地名ユンドゥンザムパトンツァム g-yung drung zam pa thon mtshams に同定している。しかし既に述べた通り 'grang rtsan が最も正しい形であるので，DPA'-BO の綴りによる同定は適當でない。

い所に位置していたと考えられるのである。

では，このようなリストの相違は何によるものであろうか。ウーバッハ氏はリストの反映する時代が異なることによる，と考える。はじめ，氏は NEL-PA のリストは8世紀前半，より正確には733年—744年の閒の状況を指すと考えたが[19]，後に自ら撤回して9世紀前半であると論じた[20]。

氏の新説は，組織が部分的に肥大化し，枠組みが崩れて不規則な形へと變形していく，というごく常識的な流れに沿っている。その點，筆者も特に異論はないが，ただその紀年比定については贊成できない。

そもそも氏の説の根底には，LDE'U1-DPA'-BO のリストは8世紀後半のツェンポ，チソンデツェン（754年—797年）の時代の頃を表す，というトゥッチ氏以來の説[21]があり，だからこそ氏はその前後である733—744年，または9世紀前半に，NEL-PA の紀年を求めているのである。ただし，トゥッチ氏は自説の根據を示していない。佐藤氏はトゥッチ説に贊成し，その證據として中ル下手のル長としてあげられる人物バー・キェサンタクナンが，まさにチソンデツェンの頃の人物であることを指摘している[22]。だが，山口氏が指摘するように，同じリストに，ウル上手の副ル長としてソンツェンガムポ時代の人物であるノンペンスムの名が擧がっている[23]。つまり LDE'U1-DPA'-BO リストは一概に時代を特定することはできないことになる。したがって，トゥッチ説を基準とする氏の推定も怪しくなるのである。

また，9世紀前半の状況を表すはずの NEL-PA-LDE'U2 の方が，スムパのルにおいては千戸數が減少していること（11→9），シャンシュンのルについては全く缺落していることなどは，いかにも不自然であろう。

實際のところ，中央アジア出土資料においては，時代を異にするリストに載るはずの千戸が，1枚の木簡において同時に現れている場合もある。

A1〕 'og pon rgod tshang〔sm〕……/

(19) Uebach 1985
(20) NEL-PA pp. 23-24
(21) *TPS* p. 737
(22) 『古チ研』pp. 753-754
(23) 『吐國研』p. 842. cf. DPA'-BO (f. 20a4) gnon 'phan gsum, LDE'U1 (p. 261) gnon 'phan gsum 'gron po.

A2〕 sde nir sto ldo ku〔g'〕

B1〕 byan po rgod lding gi sde nga srong/

B2〕 shi bzo'/

A1〕 オクポン（次長）は下手ゴーツァンの千戸

A2〕 ニルトドク

B1〕 チェンポ（料理人）はゴーディンの千戸ガソン

B2〕 シゾ

（M. I. xiv. 41: *TLTD2* p. 129. 木簡。一部轉載）

下手ゴーツァン千戸，ゴーディン千戸は同じくスムパのルに屬し，下手ゴーツァンは安定型リストの DPA'-BO, LDE'U1 に，ゴーディンは不安定型リストの NEL-PA, LDE'U2 にのみ現れる。つまり氏の說が正しければ同時に現れることは無いはずなのである。

結局の所，各リストの指す時期にずれがあるというウーバッハ氏の推論は示唆に富むが，史料の少ない現時點ではリストの對應する時代を特定することは難しく，その試みも強引であると言わざるを得ない。安定型の LDE'U1-DPA'-BO より，不安定型の NEL-PA-LDE'U2 の方が後代の變形したル制の狀況を表す，という推測は別として，そのル制の內にふくまれる千戶や人物名からその時代を特定しようと言う向きは，些か危險な試みであろう。むしろ，その個々の內容は，樣々な時代の情報が混入していると考えられるからである。2つのルに同時にあらわれる BLON のゾムテンやダンツァン (LDE'U1) などは，リストに各時代の要素が含まれている格好の例であろう。今後は，チベット語文獻中の傳記，佛敎史の記述，また地理的條件等も併せた千戶の位置比定等を通じ，各リストを比較檢討し，その內のより確實なものを選び出すという作業が必要となろうが，現時點ではこのような作業は筆者の手には餘り，取りあえずリストの不確實さを指摘するに留めたい(24)。

(24) 千戶がルの間を移動するのが何故なのかは明確ではない。しかしチベット語文獻中に現れるような一個の軍隊としてのルの姿に對し，『編年記』に現れるルは殆どの場合が行政區畫である (Uray 1960 p. 54)。そうすると，あるいは成立當初は軍事，行政兩方の性格をバランスよく兼ね備えていたル制が，時代の降るに從い軍事的性格より，むしろ行政區畫としての性格の方が強くなり，その行政區畫としての性格が，結果としてルのバランスを崩すことに繫がったとも考えられよう。

以上，チベット語文獻に載るル制について，流傳の過程を整理し，その相違について考察した。2章では，1章で得られた概括的なル制の姿を基に，中央アジア出土資料にてより詳細な姿をみていきたい。

2章　中央アジア出土資料よりみたル制

以下，對象となるのは吐蕃軍の砦跡とみられるミーラーン (Mīrān I)，マザールターク (Mazār Tāgh) の2遺跡より出土したチベット語紙文書・木簡である。吐蕃が中央アジアに進出するに及んでは，大まかに2つの路，つまり「西北のパミール方面からコータン～カシュガル地方に抜ける道」と「東北の青海から敦煌～ロプ地方に通ずる道」[25] があったと考えられている。マザールタークの砦跡とは，崑崙山脈からコータンのそばを流れタクラマカン砂漠に向かって流れ込むコータン河のほとり，コータンよりほぼ北に位置する。上の2大路からみると（吐蕃からみて）西北の路上にあったことになる。それに對してミーラーン砦はロプ地方にあった遺跡群の1つである。つまり東北の路上にあったことになり，2つの砦は期せずしてそれぞれ東西2大路の延長上にあったと考えられる。交通の要衝にあって，兩砦はその周邊地域の軍事的據點として機能していたのである。

まず兩砦の紀年について確認しておこう。コータンが吐蕃支配下にあった時期は，7世紀後半の一時期と，790年以降から吐蕃崩壞（842年）頃までの2期と考えられている。コータン周邊にあるマザールタークから出土したチベット語文書の紀年も，その2期に分けられる可能性があるが，實際のところ，森安氏の指摘するとおり[26]後者の時期のものが殆どであろう。また武內氏もチベット語契約文書の研究にて，コータン周邊の契約文書の內，紀年がはっきりするものは全て796年以降に紀年をかけている[27]。

一方，ミーラーンを含むロプ地方が吐蕃の支配下に入ったのは，およそ8世紀前半であると考えられている[28]。つまりこの時期から吐蕃崩壞までがミーラ

(25) 森安 1984 p. 5
(26) 森安 1984 p. 57
(27) *OTC* pp. 18-21
(28) 森安 1984 pp. 44-50

ーンの紀年と推定されるが，武内氏はミーラーン出土の契約文書の紀年を9世紀前半と推測しており[29]，そうなるとミーラーンの紀年もより後代に絞ることが出來るのかもしれない。いずれにせよ，ミーラーンの方が先行する可能性はあるものの，兩砦の紀年は8世紀後半～9世紀前半あたりで重なることになる。

次に，資料について簡單に紹介する。敦煌文獻を除いたスタイン將來の中央アジア出土チベット語資料のうち，紙文書については寫眞が最近公開された（武内 *OTM*）。この内ミーラーン，マザールターク出土資料は大半を占める。木簡についてはごく一部しか寫眞は公開されていないのだが，トーマス氏は，これら木簡をも含めたチベット語文書を研究し，一册の本にまとめている（*TLTD2*）。その殆どが錄文のみとはいえ，現在に至るまで重要な資料集であり，以下の考察も，主にこの書に採錄された木簡によっている。この他，中國の黃文弼が集めたミーラーン出土木簡（王堯・陳踐『簡牘綜錄』），そして參考としてドイツの探檢隊の收集したトゥルファン文書（Taube, *TBT*）を加えたものが資料群になる[30]。

ここから，ミーラーン，マザールターク2つの砦跡にみられる千戸の名を列擧したのが**表3**である（所屬のルについては，**表1**をも參照されたい）。一見すると明らかなように，一定の傾向が浮き彫りになる。

ミーラーンに特徵的なのは，所屬不明なもの[31]を除くと，殆どの千戸がスムパのルに屬していることである。スムパのルの位置は，佐藤氏の研究によるとおよそアムド周邊に廣がっており[32]，吐蕃のルの内もっともミーラーンに近い所に位置していたと考えて良いので，この特徵は理解しやすい。

それに對し，マザールタークの方では4ル ru bhzi に屬する千戸，シャンシュンのルに屬する千戸が割合まんべんなく現れる。シャンシュンのルは現在チ

---

(29) *OTC* pp. 18-21

(30) この他，ロシアのマーロフ探檢隊が得たミーラーンの木簡があるのだが（Десятовский 1953-1, -2, -3, 1955），ただしその内には本稿に關わるものはない。

(31) 所屬不明な千戸は，チベット語文獻中のリストにはないが吐蕃中央に所屬すると考えられるものと，中央以外の地方にて，非チベット人により組織された千戸との2種類があると考えられる。ただし，これらの選別，特定は更なる研究課題である。

(32) 『チ歷研』pp. 354-357, 376-379, 附圖7。

ベット高原のガリ地方にあった。つまり崑崙山脈を越えればすぐにコータンに到達するという地であり，そこに屬する兵士がコータンの北に位置するマザールタークに派遣されていたこともやはり理解しやすい。4ルは現在のウ・ツァン，つまりチベットの中心地に置かれていた。4ルからマザールタークに千戸が派遣されていることは，當時西側の方に，より軍事的要請が有った現れかも知れない(33)。ただ，この問題については本稿の主旨とは離れるので暫く置く。

注目すべきは，ミーラーン，マザールタークの兩方に，共に現れる千戸が無いことである。表により明らかなように，所屬が不明なものも含め，どの千戸も必ず片方の砦にしか現れていない。

さらに，千戸の屬するルについても同様のことが言える。所屬不明の千戸は別として，所屬のルが確認できる千戸のみについてみると，所屬を共にする千戸は，ただ一つの例外，すなわち中ルに屬するドルテ千戸のみミーラーンに現れることを除けば，必ずどちらかの砦に偏って現れている。つまりミーラーンには必ずスムパのルに屬する千戸しか現れず，マザールタークにはその他のルに屬する千戸のみが現れており，例えば右ルの千戸がミーラーンに現れたり，スムパのルに屬する千戸がマザールタークに現れることはないのである(34)。

このことは，吐蕃の中央政府からの出動命令は，直接各千戸に傳えられるのではなく，先ず各ルに行き，そして各ルの下部組織である各千戸に下されたことを示している。

なお，例外のドルテ千戸であるが，實はミーラーン出土木簡以外にも登場す

---

(33) 周知の通り，8世紀4後半期より吐蕃とウイグルは共に中央アジアに向けて勢力を擴大し，北庭で衝突することになったわけだが（789年—791年），マザールタークの紀年が先述のとおりであるならば，大凡北庭戰爭の直後邊りからの時期であり，吐蕃がその主力たる4ルの千戸をこの方面に送っていたあらわれであるとも考えられる。なお，北庭爭奪戰期の狀況については，森安 1979 參照。

(34) ただし，これは必ずしも全くの新知見というわけではなく，既にトーマス氏が簡略にではあるものの次のように述べている。「ミーラーンの文書にあげられる隊は，ほぼゴー rgod，ナクショー nag shod，ゾム 'dzom，カド kha dro といった近鄰地域に關係するが，一方マザールタークでは多くがチベット本土のものである」（*TLTD2* pp. 422-423）。又，ウライ氏 Uray, G. とウーバッハ氏も簡單ながら同様のことを述べる（Uray and Uebach 1994）。兩氏は共同でミーラーン，マザールターク出土資料の比較研究を試み，成果を發表する豫定であったが，ウライ氏の死去により未完に終わり，上の概要が殘るのみである。

表3　両砦に現れる千戸一覧表

千戸	所属のル	M.Tagh	M.I	文書番号
dor te	中ル		○	M.I.0034/M.I.lviii.003
gcom pa	中ル	○		M.Tagh.a.ii.0096
ngam ru pag	中ル	○		M.Tagh.c.ii.0042/M.Tagh.i.0015/M.Tagh.0522/M.Tagh.a.v.002and0031 / M.Tagh.c.i.007/(M.Tagh.0263/M.Tagh.0383/M.Tagh.a.iv.0033/ M.Tagh.b.ii.0038/M.Tagh.c.i.009/M.Tagh.c.iii.005/M.Tagh.c.iv.0040)
skyi stod	中ル	○		M.Tagh.a.ii.0078/M.Tagh.c.iii.0017/ M.Tagh.c.iv.0027
ste 'jom	中ル	○		M.Tagh.a.iii.0026
yar skyang	中ル	○		M.Tagh.0544/M.Tagh.0280/M.Tagh.a.ii.0096(g-yar skyang)
lho brag	左ル	○		M.Tagh.0264/M.Tagh.a.ii.0028/M.Tagh.c.i.0023
dags po	左ル	○		M.Tagh.0332
mnyald pa	左ル	○		M.Tagh.a.ii.0078/M.Tagh.b.i.0075/M.Tagh.c.iii.0017/M.Tagh.c.iii.0078(*1)
nyen kar	右ル	○		M.Tagh.0193(nen kar)/ M.Tagh.a.vi.0014/M.Tagh.b.ii.0044/ M.Tagh.c.iv.0029/
lang myi	右ル	○		M.Tagh.a.iii.0013/M.Tagh.a.iii.0033/
grang brtsan	右ル	○		M.Tagh.a.vi.0020/M.Tagh.b.ii.0047
phod kar	右ル	○		M.Tagh.b.i.0095/M.Tagh.0291/Hedin 1(*2)/(M.Tagh.0302)
yel rab	右ル	○		M.Tagh.1616/(M.Tagh.c.ii.0038)
shang	右ル	○		M.Tagh.i.0025/M.Tagh.a.i.0031/M.Tagh.c.ii.0046/(M.Tagh.c.iii.0044)
gad sram	支ル	○		M.Tagh.a.4/(M.Tagh.a.iii.0019)
'grom pa	支ル	○		M.Tagh.a.ii.0096/M.Tagh.b.i.0095(grom pa)
lha mtsho	支ル	○		M.Tagh.a.ii.0096
khri boms	支ル	○		M.Tagh.c.iv.0033/M.Tagh.0382(khri goms)/ (M.Tagh.c.iii.0063/H.6)
mang khar	支ル	○		M.Tagh.0506(*4)/M.Tagh.0343/ (M.Tagh.a.iv.00126)
mkhar sar	支ル	○		M.Tagh.a.iv.0087
khri dang	支ル	○		M.Tagh.c.iv.009/M.Tagh.c.iv.0041
mnyang ro	支ル	○		M.Tagh.b.i.0095
nag shod	スムパのル		○	M.I.ii.32/M.I.iv.57/M.I.xvi.005/M.I.xiv.67/M.I.xiv.76/M.I.xiv124and129 /M.I.xxv.001/M.I.xxviii.0017/M.I.xxviii.0028/M.I.xxviii.0034/ (M.I.ii.10/M.I.viii.37)
rgod tsang stod	スムパのル		○	M.I.iv.85/M.I.xiv.108d/M.I.xxviii.0017/M.I.xliv.7
rgod tsang smad	スムパのル		○	M.I.viii.45/M.I.xi.80/M.I.xiv.006/M.I.xiv.39/M.I.xiv.41/M.I.xxvii.9/ M.I.xxviii.0017/M.I.lviii.004
rgod lding	スムパのル		○	M.I.iii.14/M.I.xiv.41/M.I.xiv.135/(M.I.xiv.008)
'dzom stod	スムパのル		○	M.I.ii.17/M.I.ii.37a/M.I.ii.38
'dzom smad	スムパのル		○	M.I.ii.25/M.I.i.6/(M.I.viii.17/M.I.xxiii.009b)
tre smad	スムパのル		○	M.I.0046

る。敦煌文書のうち，有名な P. T. 1287 つまり『王統紀』には次のようにある。

chab srId che ste long shan la rgyud yan chad / pyag du bzhes nas / mthong khyab khrI sde lnga btsugs / bde blon khams ched po gchig gsar du bskyed do // …… / 'bangs kyI nang na / dor te pyugtshams

kha dro	スムパのル		○	M.I.xiv124and129/M.I.xxviii.0017/M.I.xli.3/ M.I.xliii.003/(M.I.xliii.3)
kha bzangs	スムパのル		○	M.I.xxv.001(*3)
nyi mo bag	上手シャンシュン	○		M.Tagh.c.iii.0019
'o tso pag	上手シャンシュン	○		M.Tagh.a.iii.002/M.Tagh.b.i.0058/M.Tagh.b.i.0095/M.Tagh.c.i.0031/ M.Tagh.c.i.0010('o zho pag)/ M.Tagh.c.ii.006
rtsal mo pag	上手シャンシュン	○		M.Tagh.b.i.0095/M.Tagh.c.i.0013
yang rtsang	下手シャンシュン	○		M.Tagh.0506(*4)/M.Tagh.0262/M.Tagh.a.iv.00121/M.Tagh.b.i.0095/ M.Tagh.c.iv.002/ (M.Tagh.a.iii.0021/M.Tagh.vi.0075)
spying rtsang	下手シャンシュン	○		M.Tagh.c.ii.0016
'brom	?	○		M.Tagh.a.i.0031
'brong tsams	?	○		M.Tagh.0614/M.Tagh.a.iii.0019(bro tsams)/ M.Tagh.a.iii.004/M.Tagh.a.vi.0019/ M.Tagh.c.ii.0046
bzang 'or	?	○		M.Tagh.0614/M.Tagh.a.iii.0013/M.Tagh.b.i.002/ M.Tagh.c.ii.0046/ (M.Tagh.a.iv.0026/M.Tagh.c.iii.0060)
bar kho	?	○		M.Tagh.c.i.001
dgyes po	?	○		M.Tagh.0351/M.Tagh.c.ii.0017/(M.Tagh.a.ii.0097)
gom pa	?	○		M.Tagh.a.iv.0037/M.Tagh.a.v.008
mngal 'phan	?	○		M.Tagh.b.i.0022/M.Tagh.c.ii.0046
nyag tsve	?	○		M.Tagh.0573/H.3
rlang	?	○		M.Tagh.c.iv.0035
…bu rtsang	?	○		M.Tagh.a.i.0031
…dang phying ba	?	○		(M.Tagh.a.ii.0097)
…mkhar	?	○		(M.Tagh.0289)
'bri char smad	?		○	M.I.xxviii.7
mthong khyab	?		○	M.I.xiv.0012/M.I.lviii.001/(M.I.xxv.003)
nag khrid	?		○	M.I.xxviii.0016
rtse rgod	?		○	M.I.xix.002/M.I.xxv.001
snog shod	?		○	M.I.xiv.41
zom	?		○	M.I.xiv.0061

特に注記のない場合，*TLTD2*より引用．
コータン周辺地域の出土文書は便宜上マザールターク項に入れた．
(文書番号)は，*TLTD2*に番号のみが載るものを指す．
(千戸名)は，同千戸とは考えられるが綴りが異なるものを指す．
*1=*OTM* p.160 no.311
*2=*OTC* text10
*3=*OTM* p.193 no.592
*4=*TLTD2* p.178ではM.Tagh.0050とするが，*OTC* p.286により文書番号をM.Tagh.0506に修正した．

ste 'dzom dpa ba'I mtshan mar / stagI thog bu stsal to /

領土は大きくなり，隴山山脈より向こう側をお手に入れて，5つのトンキャブ萬戸を建てた。大デロン國を新たに生じさせた……臣下のうちでは，ドルテ，チュクツァム，テゾムが勇敢である徴として，虎の thog bu(?)[63]

[63] 不明。山口氏は「旗飾」とする（『吐國研』p.882）。

を頂いた。

(*CHOIX2* pl. 571 ll. 383-386)

上の記事は，チソンデツェンがツェンポであった時代の章にあり，770年代後半より吐蕃が河西方面の都市を次々と占領下に入れた時期を反映していると考えられる。記事による限り，當時ドルテ千戸は同じく中ルに屬するチュクツァム，テゾム千戸と共に功を擧げたらしい。

この3つの千戸のうち，チュクツァム千戸はこの後も河西に殘って駐屯していたようだ[36]。直接的證據はないものの，ドルテ千戸についても，チュクツァム千戸と同様に河西地方に駐屯していたのかも知れない。

いずれにせよ上の分析結果は，實際には吐蕃軍がどのような形で中央アジアに派遣されていたのかを考える上で足がかりになる。ミーラーンとマザールタークは東西の各路上にあったが，さらに**表3**より同一軍隊の指揮下にあったのではなく，それぞれ別軍隊の指揮下にあったことが明らかとなった。つまり吐蕃は東西の各路から別々に軍隊を派遣していたことにもなる。そうすると，2砦の比較によって，2軍隊の比較が出來ることになり，吐蕃軍の實像により近づくことが出來るはずなのである。

さて，所屬のルによって派遣先が分かれることより，吐蕃軍が實際にル單位で派遣されていたという推論が當然成り立つであろう。事實，王堯・陳踐兩氏は，あるミーラーン出土の木簡に右ルのル長が現れる，としている（次節で述べる)。果たして兩氏の言うとおりであれば，この木簡はル單位の派遣の證左となり，まさに吐蕃軍がル單位で中央アジアにも出動していたということになるが，本當にそうなのであろうか。また千戸についても，兩砦に同時に現れないことが確認されたが，個々の事例を檢討することにより，更に千戸の機能について考えてみたい。

---

(36) 河西にあったデガユツァル寺院建設にあたる起請者の内に，チュクツァムの千戸長がいる（P. T. 16 and VP 751)。なお，藤枝氏の指摘以來（藤枝 1961)，敦煌文書中の擘三部落はチュクツァム千戸であるとされてきたが，楊 1986 (p. 366)，武内 1994 (p. 858 n. 11) はむしろ「三部落に擘く」と解釋すべきだとする。從いたい。

1　中央アジアにおけるル

1章で述べたように，後代の書によれば，ルは上下に分かたれ，それぞれに4つの千戸が屬している。上下にはそれぞれル長がいるので，ル長は4つの千戸を統轄することになる。つまり，ル長という言葉を中央アジアにおいても確認することが出來れば，中央チベットのルが中央アジアまでやってきていた證左になるはずである。

中央アジア出土文書においても，ル長は確かに登場している。しかし多くの場合，ル長という言葉は中央チベットのル長という意味では使われていない。例えば，次のような例がある。

A2〕tshal byi'i ru dpon du bskos……

ツェルチ（軍管區）のル長に任命した

（M. I. xli, 0013: *TLTD2* p. 445. 木簡。一部轉載）

ツェルチ tshal byi とは，ロプノールの西の小ノブ地方にあった吐蕃の軍管區 khrom の名である(37)。しかし軍管區にルがあったことは知られていない。よって，この場合でのル長とは，後代の書で述べられるような吐蕃中央の「長」ではないと考えられる。また，P. T. 1089 には，吐蕃支配期の沙州における役職の序列表が載るが，其の序列の頂點にはル長が擧げられている。これは勿論吐蕃中央の「ル長」ではなく，軍管區の長官にあたる役職なのである。

ただ，次に擧げる木簡は少し注意を要する。

A2〕……zhing gcig rab / g-yas ru ru dpon gyi zhing dor gcig / mon ltog……

A2〕　　……右ルル長の畑1ドル(38)。モントク（人名？）……

（59 RMF 第5室　原號 6631 分類 1364：『簡牘綜錄』p. 78. 木簡。一部轉載）

文中，右ルル長という語が現れる。王堯・陳踐兩氏は，これをまさに吐蕃中央

(37) 吐蕃の支配下に比較的早期に入ったスムパ，シャンシュンはル制に組み込まれたが，その他の支配地域には基本的には軍管區 khrom 制が敷かれていた。ツェルチ軍管區の他にも沙州も含む瓜州軍管區，涼州を中心としたカルツェン軍管區などがあった。各軍管區の要職はチベット人が占め，中央と同じく毎年夏冬2度に會議が開かれ，大事を決定していたようだ。Uray 1979 參照。

(38) 1ドル dor は敦煌文書における「突」であり，すなわち10畝である。姜 1984 p. 15，池田 1990 pp. 50–51。

の右ルのル長とする[39]。もしその解釋が正しいならば，少なくともミーラーン邊りまで右ルのル長がやって來ていたことになり，吐蕃軍がル單位で行動したことの證據となろう。

しかし既に見たように，ミーラーンでは右ルに屬する千戸は全く現れない。千戸の例がないにも關わらず，その上部組織のル長のみ例があるというのは，如何にも不自然ではないか。むしろ筆者は，この「右ルのル長」もローカルな役職ではないか，と考える。同様の例として，スタイン敦煌文書 Ch. 73. xv. frg. 12 が擧げられるからである。この文書については，既にトーマス氏を初めとして何人かが解釋を加えているので[40]，ここでは內容にまでは踏み込まない。ただ概要のみ述べると，要するに人員リストであり，その構成人員は吐蕃支配下の敦煌において組織された漢人千戸から選ばれている。構成人員は幾つかの隊に分かれているようだが，惜しむらくは上端が切れており完存していないので，様々な解釋を生んできた。さて，この文書の內52—53行目に，

……dbu ru'i ru 'bring yang stag slebs kyi dar tshan // …… //

中ルにおける中位のル（中隊長）であるヤンタクレプのダルツェン（小隊）[41]

(*CHOIX2* pl. 638)

という文が現れる。この文書の中ル dbu ru が，吐蕃中央のルではなく，隊の編成としてのルであることは，隊員が全て漢人であることよりみて明白である。中ルとある以上，恐らくこの他に右ル，左ルも存在していたはずである。もともとルとは「角」の意味である。吐蕃中央のルに關しても，上述の通り元來は軍事組織として出發したものと考えられ，その意味ではルとは軍隊の一單位として使われた言葉であったのだろう。問題の木簡に現れる「右ルのル長」のルも，ミーラーン周邊にいた一隊を現すものであって，吐蕃中央のルとは結びつかないと考えられるのである。

結局の所，中央アジア出土資料には吐蕃中央のル長は現れない。思うに，は

(39) 『簡牘綜錄』p. 26

(40) *TLTD2* pp. 67–71, Uray 1961, 藤枝 1961 pp. 229–232,『吐國研』pp. 838–841。

(41) ダルツェン dar tshan については幾つか解釋があるが，武內 1994 pp. 859–860 n. 30 に簡潔にまとめられているので參照されたい。なお武內氏は dar tshan を dar tsho「小隊」の古形と考える。從いたい。

じめに述べたように，ル単位で軍隊が動くということは數萬人規模の大軍が動くことになるが，チベット高原内での出動，または一時的な出動ならまだしも，高地の中央チベットから決して平坦ではない道を通り中央アジアに至って軍事活動を行うことは，繼續して行えることではない。ル単位で軍隊を派遣することは，現實的見地からみてもありえないのである。

では，ルの下部組織である千戸については如何であろうか。節を改めて考察したい。

2　中央アジアにおける千戸

兩砦を通じて，次にあげるような個人の名札とおぼしき木簡が多くみられる。

1〕 /:/ 'o tsho pagi〔sde〕/ nya gram lha brtsan

2〕 bzhag /

1-2〕 オツォパクの千戸ニャダムラツェンシャク

(M. Tagh. a. iii, 002: *TLTD2* p. 460, 461. 木簡)

1〕 /:/ rgod tshang stod kyi sde / stom gyang lha

2〕 'brug brtsan

1-2〕 ゴーツァン上手の千戸トムギャン(?)ラドゥクツェン

(M. I. iv. 85: *TLTD3* Plate XVI,: *TLTD2* p. 128. 木簡)

これらは基本的に所屬の千戸，個人名，それに加え時々は役職が記されている。つまりルではなく千戸が各人を特定する指標となっている。

nag shod	rgod tsang smad	rgod tsang stod	kha dro
gro　nas	gro　nas	gro　nas	gro　nas
ナクショー	下手ゴーツァン	上手ゴーツァン	カド
小麥　大麥	小麥　大麥	小麥　大麥	小麥　大麥

(M. I. xxviii. 007: *TLTD2* p. 126. 木簡)

ナクショーなどそれぞれが千戸の名を指すことは言うまでもない。恐らく食料の配給についての木簡であろうが，數量については記されていない。ここで重用なのは，記述が千戸ごとに分けられていることだ。つまり，千戸ごとに各屬

の人員に對して食料の配給があったことになる。他にも次のようなものがある。

A1〕 /:/ 'phan la brtsan rmed

A2〕 pa' / rtse 'thon gi zhing dor

B〕 phye (phyed) dang gnyi〔s〕

A1〕ペンラツェンが耕す

A2〕ツェトン（千戸）の畑

B〕1.5ドル。

(M. I. viii. 58: *TLTD2* p. 160. 木簡)

ツェトン千戸は，スムパのルに屬する。このように，食料の配給などは千戸單位で爲されていた様だ。

また，千戸の長である千戸長 stong pon を記す木簡もいくつか例がある。

1〕 // spong rang slog / rgod tshang smad kyi stong

2〕 pon gyi zhing / dor gsum /

1〕ポンランロク（人名）。下手ゴーツァンの

2〕千戸長の畑 3 ドル。

(M. I. viii. 004: *TLTD2* p. 127)

下手ゴーツァン千戸もスムパのルに屬する。ポンランロクなる人物が千戸長だと考えられる。

lang myi stong pon stong cung……

ランミ（千戸の）千戸長，千戸小長……

(Tu 96: *TBT* p. 66, Tafel X text 17. 紙)

これはトルファンより見つかった紙文書の斷片である。年代は不明ではあるが，ランミ千戸は右ルに所屬するチベット中央の千戸である。

これら千戸長が現れるような千戸が一單位集團として中央チベットより派遣されていたことは，先程述べたような駐屯千戸の例から見ても十分豫想されることである。ルと違い，千戸は中央アジアに向かって實際に派遣されていたようだ。

しかし，吐蕃中央より派遣された兵士達は，必ずしも千戸單位で活動してい

たわけではない。次節，その例である4人隊について述べよう。

3　千戸と4人隊

ミーラーン，マザールターク出土の文書の内には，ソパ so pa「偵察者」と呼ばれる役目をもつ人々についてのものが何點かある。トーマス氏は，彼らが多くの場合ツクポン tshugs pon，オクポン 'og pon という肩書きをもつ者によって率いられていたことを紹介し，併せて彼らがたいていの場合4人であることもいう(42)。氏は明記しないが，その4人隊とは先のツクポン tshugs pon「駐屯隊長」，オクポン 'og pon「次長」にチェンポ byan po「料理人(？)」(43)，チェンヨク byan g-yog「料理人補佐」を併せた者である。また，武内氏は *OTC* にてこの4人隊について簡單な注をつけているが (p. 322)，いかんせんテキスト解説の注であるので，ごく簡單に概觀を述べるに過ぎない。管見の限り，4人隊に關してはこの他に研究はない。思うに，この4人隊自體が興味深い研究課題ではあるのだが，詳細は別の機會に讓り，本稿のテーマに關係する部分のみを取り上げることにしよう。

まずマザールターク出土文書からみてみよう。

verso 1] gyi rtse na b[o]d gnyis li gny[i]s / stag rtse khri skugs 'jor na bod gsum / la / grom pa'i

2] sde my[i] tshes kong / myang ro'i sde lo nan myes chung / rtsal mo pag gi sde

3] snya shur stag bzang ///

4] bye ma 'dord gyi rtse na bod gnyis li gchig / yang rtsang gi sde phur myi rke tung / 'o tso pag gi sde sro

5] sti (lti?) kro / tshard jam nya'i li ce'u 'do // 'o tong gy[u] mo na bod gnyis li gchig / phod kar gyi……

---

(42) *TLTD2* pp. 172–173, 426–427

(43) 1組の隊の内，2人までもが賄い方を擔當するのは奇妙ではあるが，管見の限り byan po には「料理人」の他に意味はない。また敦煌文獻の蕃漢對照語彙 (Or. s. 2736) には，byan po/shig shu/ (l. 10 Plate 12) とあり，shig shu はトーマス等により「司厨」に還元されている (Thomas 1948 p. 757)。疑問は殘るものの，當面は從う。

紙背　1-3〕……の頂きにチベット人２人とコータン人２人。

タクツェチクジョルにチベット人３人。

（それには）ドムパの千戸ミツェーコン，

ニャンロ千戸ロナンニェーチュン，

ツァルモパク千戸ニャシュルタクサン。

4-5〕チェマドルの頂きにチベット人２人とコータン人１人。

（それには）ヤンツァン千戸プルミケツン，

オツォパク千戸ソティト，

ジャムニャ jam nya のツァル tshar(44) のコータン人チェウド。

オトンギュモにチベット人２人とコータン人１人。

（それには）ポーカル千戸の……

（M. Tagh. b. i. 0095: *OTM* p. 128 no. 247,: *TLTD2* p. 173. 紙）

この文書は，それぞれの頂き rtse に小隊が駐留している状況を記している。各駐留地を見ると，次の２點が特徴的である。つまり，地元のコータン人と吐蕃人が一隊を作っていること，そして更に注目すべきは，吐蕃人の所屬する千戸がばらばらなことだ。タクツェチクジョルに駐留している一隊の所屬千戸をみると，ドムパ千戸，ニャンロ千戸は，支ルに屬し，ツァルモパグ千戸は上手シャンシュンに屬している。チェマドルの頂きでは，オツォパグ千戸は上手シャンシュンに屬するし，ヤンツァンは下手シャンシュンの千戸であろう。オトンギュモに留まっている隊をみると，ポーカル千戸は右ルに屬する千戸である。つまり所屬する千戸，そして所屬するルも異なった人閒が一隊を組んでいるのである。このほかの例ではどうだろうか。

1〕// 'o tong gyu mo na / bod gnyis li gnyis la / mnyald pa'i khri thag par 〔rtse〕s byin……

2〕li……s rtse na / skyi stod kyi sde dngul klu bzang 'og phon……

1〕オトンギュモにチベット人２人とコータン人２人。

(44) 吐蕃支配下，コータン人はツァル tshar と呼ばれる組織に編成され，管理されていたようだ。ジャムニャはこのツァルの長であろう。cf. *TLTD2* pp. 168-169。

ニャルパ（千戸）のチタクパルツェーチン……

2〕コータン人(？)……。……の頂に，上手キィの千戸グールザン。

オクポン（である)。

(M. Tagh. a. ii. 0078: *TLTD2* p. 215. 木簡)

ニャルパ千戸は左ルに，上手キィ千戸は中ルに屬している。上の２例は必ずチベット人２人とコータン人２人という編成だが，必ずしもコータン人を交えて編成するわけでもない。

// snang dang 'phrul gyi rtse na bod bzhi tshugs gcig la / -yi

ナンダントゥルの頂にチベット人４人が駐屯しているものについて……

(M. Tagh. a. i. 003: *TLTD2* pp. 228-229. 木簡)

ここでは，一隊全てがチベット人で構成されている。

A1〕……

A2〕……〔la〕// gros mngan gi 'bangs kho lho

B1〕……n snang〔hu〕'a mkar bu na / bod bzhi tshugs

B2〕……〔'〕〔bar tse s-ir tsh-gs po-〕

A1〕……

A2〕……に，ドーゲンの臣下コロ

B1〕……ナンフカルブにチベット人４人が駐屯して……

B2〕……バルツェ……（地名？）に，ツクポン……

(M. Tagh. ii. 1: *TLTD2* p. 247. 木簡)

前半部分は不明。この木簡でも，一隊がチベット人に占められており，必ずしもコータン人を交えるわけではないことがわかる。

マザールターク出土文書からは，次のことがいえよう。４人隊が編成されるとき，その構造は，隊中にコータン人を組み入れることがあるが，コータン人のみでは作られないこと，チベット人のみで構成されることもあること，更にチベット人の所屬をみると，所屬する千戸とは無關係に一隊が作られること，そして千戸の所屬するルに關しても同様に構成の基準とはなっていないことである。

では，ミーラーンの砦においてはどうであろうか。

割れ目
↓

M. I. xiv. 129	M. I. xiv. 124	
A1〕 // tshugs pon kha dro	'i sde	'og pon rgod tsang……
A2〕 lang klu rton /		sa stong klu sto' /……
B1〕 byan po nag shod kyi〔s〕de /		byan g-yog chasla……
B2〕 th〔r〕e mtong rma /		rgyal bon ma〔?〕 (s〔l〕a〔d〕?)
		shi' /

↑
shad

A1〕 ツクポンはカド千戸	オクポンはゴーツァン(千戸の)
A2〕 のランルトン。	サトンルト。
B1〕 チェンポはナクショー千戸	チェンヨクはチャ……
B2〕 のテトンマ。	ゲルボンマ（レー？）シ。

(M. I. xiv. 124 and 129: *TLTD3* pl. xv,: *TLTD2* pp. 129-130. 木簡)

M. I. xiv, 124 and 129 は，幸い寫眞が *TLTD3* に附されているのでそれによりトーマスの翻字のレイアウトを若干修正した。なお二つの番號がついているのは，もともと1枚の木簡が翻字の通り眞ん中より2つに割れていたことによる。木簡の眞ん中に大きく shad が入り，それぞれ表面の向かって左側にツクポン，右にオクポンが記され，裏の左にチェンポ，右にチェンヨクが記されている。

ミーラーン砦出土の木簡，文書に現れる千戸は，所屬不明なものを除けばほぼスムパのルに屬している。この木簡に現れる千戸も，全てスムパのル所屬である。ここでは，1枚の木簡に4人登記されているが，マザールタークの場合と同じように所屬の千戸には特に法則は見られない。

A1〕 // 〔tsh〕ugs pon snog shod kyi	'og pon rgod tshang〔sm〕……/
A2〕 sde 〔rtsig〕 yu yu〔ng ma〕	sde nir to ldo ku〔g'〕
B1〕 byan po rgod lding gi sde nga srong	〔bya〕n yog snog sho〔d〕……
B2〕 shi bzo'	sde pho yong gal 〔lbag ?〕
A1〕 ツクポンはノクショー千戸	オクポンは下手ゴーツァン千戸

A2] のツィクユユンマ。	のニルトドク。
B1] チェンポはゴーディン千戸のガソン	チェンヨクはノクショー
B2] シゾ。	千戸のポヨンガルバク。

(M. I. xiv. 41: *TLTD2* p. 129. 木簡)

トーマスの翻字では表(A)と裏(B)において1行目と2行目が繰り返されており，少々解りにくい。おそらくこの木簡も M. I. xiv. 124 and 129 と同じ書式で書かれている。そこで理解しやすいように翻字のレイアウトを修正した。ここでもやはり所屬千戸についてはばらばらである。しかもツクポンとチェンヨクが同じノクショー千戸から選ばれており，異なる千戸同士を組み合わせるわけでもないことが解る。なお，ノクショー千戸は所屬不明である。以上より，ミーラーンにおいても千戸という單位は4人隊を作るときに特に留意されていないことが解る。

兩砦において，4人隊はル，千戸という單位で作られているのではなかった。別系統の指揮下にあるはずの兩砦に共通して見られるということは，それが4人隊の常態であったと考えられよう。つまり偵察などの實務では，千戸單位でさえないことになる。そうすると，砦にいた吐蕃の兵士が一體どのように派遣されていたのか，問題となろう。つまり，彼らが本當に「千戸」の一員として派遣されてきたのか，という疑問である。駐屯千戸などの例も確かにあるが，そのような軍隊としての千戸がある一方，むしろ邊境防備の人員として，中央の各千戸から幾人かづつ選拔され，派遣されていたと考える方が自然ではないだろうか(45)。そうすると，千戸單位で管理されてはいるものの，吐蕃の兵士にとって千戸は歸屬單位に過ぎなかったのかも知れない。ただし，資料不足の現時點では推測の域を免れず，更なる考察は今後の資料の公開を待つことに

(45) さらに言えば，既に擧げたような名札型の木簡が多く出土するのに對し，例えば千戸の人員を一覽にしたような紙文書は，スタイン將來の紙文書が全て寫眞版で公開されている（*OTM*）にも關わらず，管見の限り見あたらない。勿論一枚毎の木簡を束ねて一覽表を作成していた可能性はあるし，現に各木簡の右端には大抵紐通しの孔が開いているが，その場合，何百枚にのぼるであろう木簡を1つに束ねることになり，あまり現實的ではない。抑も4人隊の場合は紙文書の一覽表が殘っているわけなので，千戸の人員一覽表が全く見つからないのはやはり不自然であり，もともと無かった可能性がある。

したい。

以上まとめると，次のようになろう。ルによって，また千戸によって派遣先が異なることは，明らかに命令系統が中央政府→ル→千戸の順であったことを窺わせる。しかし，中央アジアにおいては本土のルが基本單位として機能しているわけではなく，むしろ千戸が基本單位となっている。だが，偵察のような實際の任務につくときは，千戸という單位も特に機能しておらず，砦にいた兵士は邊境防備のため中央から選拔して派遣されていた可能性がある。

今後の展望

以上，チベット語文獻，出土資料の兩面からル制についてみてきた。チベット語文獻からは，資料の整理を通じ，ル制が一時期アンバランスな形をしていたことをみた。また出土資料からは，兵士の派遣命令が中央政府→ル→千戸の順に下されていたらしいこと，實際に軍隊として派遣される可能性があるのは千戸からであること，また偵察などの實務に關しては千戸單位ですらないことをみた。2面からみたル制の姿は，一致するとまでは言わぬまでも，矛盾してはいない。そして少なくとも，チベット語文獻に見られるような一個軍隊としてのルの姿はそこにはない。ル制が出來た當初は，或いはルは一個の軍隊として機能し，遊牧國家的要素を有していたのかも知れない。しかし，はじめにも述べたように，地理的條件等により恐らく獨自の發展をしたのであって，今まで見てきたような姿になっていったと考えられる。

更にはこの事は，漢文資料に全くル，千戸らしきものが言及されていないことにも繋がる(46)。少なくとも當時の漢人の目には，吐蕃軍がそのような組織であるとは映っていなかったのである(47)。

目下の課題としては，砦における兵士の姿を明らかにし，吐蕃軍のシステムを研究することが擧げられる。この點については，幸い，スタイン將來のチベット語木簡は着々と寫眞公開にむけての整理が進みつつあり，早晩全容が明ら

(46) 『古チ研』p. 750

(47) むしろ，漢人の注意を引いたのは，非チベット人部隊を先鋒に常に利用していたことであった（『古チ研』p. 760）。この非チベット人部隊とル制とはどのような關係にあったのか，今後の課題の一つである。

かになる。研究狀況は更に改善されるはずである。

また吐蕃中央地方のル制と，周邊地方の軍管區制との關係，さらに吐蕃國家全體の中におけるル制の位置についても言及できなかった。併せて今後の研究課題としたい。

謝辭：神戸市外國語大學教授武內紹人氏に，草稿段階で目を通していただき，貴重なアドヴァイスを頂戴した。記して謝したい。

參考文獻・略語一覽表

池田　溫　1990　「敦煌における土地稅役制をめぐって一九世紀を中心として一」唐代史研究會報告7『東アジア古文書の史的研究』（東京：山川出版社）pp. 46-70

王堯・陳踐　1986　『吐蕃簡牘綜錄』（北京：文物出版社）〔『簡牘綜錄』〕

姜　伯　勤　1984　「突地考」『敦煌學輯刊五期』pp. 10-18

栗田　靖之　1987　「チベットの自然と人」長野泰彦・立川武藏編『チベットの言語と文化』（東京：冬樹社）pp. 10-43

佐藤　長　1958—1959　『古代チベット史研究』2卷（repr. 京都：同朋舍　1977）〔『古チ研』〕

1978　『チベット歷史地理研究』（東京：岩波書店）〔『チ歷研』〕

武內　紹人　1994　"TSHAN: Subordinate Administrative Units of the Thousand-districts in the Tibetan Empire", *6th IATS* pp. 848-862

1995　*Old Tibetan Contracts from Central Asia.*『中央アジア發現古チベット語契約文書』（東京：大藏出版）〔*OTC*〕

1997　*Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection of the British Library* vol. 1 (London: The British Library) 〔*OTM*〕

藤枝　晃　1961　「吐蕃支配期の敦煌」『東方學報』31　pp. 199-292

森安　孝夫　1979　「增補：ウイグルと吐蕃の北庭爭奪戰及びその後の西域情勢について」流沙海西奬學會編『アジア文化史論叢3』pp. 199-238

1984　「吐蕃の中央アジア進出」『金澤大學文學部論集　史學科編』4　pp. 1-85

山口　瑞鳳　1968　「蘇毗の領界—rtsang yul と yan lag gsum pa'i ru」『東洋學報』50　pp. 387-455

1983　『吐蕃王國成立史研究』（東京：岩波書店）〔『吐國研』〕

楊　際　平　1986　「吐蕃時期沙州社會經濟研究」韓國盤主編『敦煌吐魯番出土經濟文

書研究』（廈門）pp. 357-413

『王統紀』 P. T. 1287: *CHOIX2* pl. 557-577

『編年記』 P. T. 1288+I. O. 750+B. M. Or. 8212: *CHOIX2* pl. 579-594

6th IATS *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th seminar of International Association for the Tibetan Studies FAGERNES 1992* 2vols (Oslo: The Institute Research in Human Culture)

AOH *Acta Orientalia Hungaricae*

BLON O rgyan glim pa (gter ston), *Blon po bka'i thang yig: bka' thang sde lnga*, dga' ldan phun tshogs glin 版 (New Delhi: Śatapiṭaka no. 307 1982) ca 章

CHOIX2 Spanien, A et Imaeda Yoshiro, *Choix de Documents Tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*, Tome II (Paris: Bibliothèque Nationale 1979)

DPA'-BO dpa' bo gtsug rag phreng ba, *chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*, vol. ja, (New Delhi 1962).

LDE'U1 mkhas pa lde'u, *rgya bod kyi chos 'byung rgyas pa*『弟吳宗教源流』(Lhasa: 西藏人民出版社 1987)

LDE'U2 lde'u jo sras, *chos 'byung chen mo bstan pa'i rgyal mtshan*『底吾史記』(Lhasa: 西藏人民出版社 1987)

Martin, Dan

1997 *Tibetan Histories* (London: Serindia Pub.)

Taube, Manfred

1980 *Die Tibetica der Berliner Turfansammlung* (Berlin) [*TBT*]

Thomas, Frederick W. and Giles, L

1948 "A Tibeto-Chinese Word-and-Phrase Book", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 12-3, 4 pp. 753-769

Thomas, F. W.

1935 *Tibetan literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan* vol. 1 (London) [*TLTD1*]

1951 *ibid.* vol. 2 (London) [*TLTD2*]

1955 *ibid.* vol. 3 (London) [*TLTD3*]

Tucci, Giuseppe

1949 *Tibetan Painted Scrolls* 3 vols (Rome, repr. 京都：臨川書店 1980) [*TPS*]

1956 *Preliminary Report on Two Scientific Expeditions in Nepal* (Rome) [*PRT*]

Uebach, Helga

1985 "An 8th Century List of Tousand-districts in Ne'u Pandita's History", Aziz, B. and Kapstein, M. eds.*Soundings in Tibetan Civilization* (New Delhi), pp. 147-151

1987 *Nel pa paṇḍitas chronik Me tog phreng ba* (München) [NEL-PA]

1992 "Notes on the Section of Law and State in the Chos-'byung of lDe'u", S. Ihara and Z. Yamaguchi eds, *Tibetan Studies /Narita 1989*, (成田山) pp. 823-832

1999 "On the Thirty-seven Holy Places of the Bon-pos in the Tibetan Empire" *Studia Tibetica et Mongolica. Fetschrift Manfred Taube* pp. 261-277

Uray, Géza 1960 "The Four Horns of Tibet According to the Royal Annals" *AOH* 10 pp. 31-57

1961 "Notes on a Tibetan Military Document from Tun-huang" *AOH* 12 pp. 223-230

1979 "KHROM: Administrative units of the Tibetan Empire in the 7th-9th Centuries", Aris, M. and Aung Sang Suu Kyi eds. *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson*, (Warminster) pp. 310-318

Uray, G. and Uebach, H.

1994 "Clan versus Thousand-district versus Army in the Tibetan Empire", *6th IATS* pp. 913-915

Воробьев-Десятовский, В. С.

53-1 "Коллекция Тибетский Документов на Дереве, Собранная С. Е. Маловым" *Ученые залиски Инстута востоковедения* 6 pp. 167-175

53-2 "Тибетский Документ на Дереве из Района Озера Лоб-нор I" *Эпиграфика Востока* 7 pp. 70-76

53-3 "Тибетские Документы на Дереве из Района Озера Лоб-нор II" *Эпиграфика Востока* 8 pp. 77-85

55 "Тибетские Документы на Дереве из Района Озера Доб-нор III" *Эпиграфика Востока* 10 pp. 68-73

contained less information than the currently published *at-Tibr*), and added other materials and accounts that he had collected in the process of sifting information for the descriptions in the *ar-Rawḍ*. It can be said that his personal historical descriptions and detailed narrative description of events are characteristics of the work because his own times were the object of his study. Moreover, having compared the *ar-Rawḍ* to other comtemporary histories, I have been able to indicate concretely how 'Abd al-Bāsiṭ's manner of description was carried on later by Ibn Iyās, a fact that has not heretofore been illustrated sufficiently.

THE OLD TIBETAN *RU* AND THE THOUSAND DISTRICT

IWAO Kazushi

In Tibet proper during the age of the Tu fan 吐蕃, units of military organization known as *ru*, originally meaning horn and signifying a banner, were instituted across the seventh to the ninth century. Each *ru* included eight *stong sde* (a thousand district), a single *stong bu chung* (a small thousand district), and a single *sku srung gi stong sde* (a thousand district of royal bodyguards). The *ru* formed the basis of Tu fan military strength. As a number of scholars have previously noted, the origin of this organization is thought to be found in the northern nomadic states, and as the high plateaus of Tibet are crisscrossed by mountains and ravines, unlike the grassy plains of the nomadic peoples, it is difficult to imagine that the *ru* was a development solely of the Tu fan. In this article I consider how the *ru* actually functioned in regard to the following two points.

1. The *ru* system as it appears in post Tu fan Tibetan literature.

In Tibetan-language literature there are now known to be five works that contain detailed information on the *ru* system, i. e., the *Blon po bka' thang*, the *Mkhas pa'i dga' ston*, the *Me tog phreng ba*, and two versions of the *Lde'u chos 'byung*. They divide the *ru* system into two archetypes, a stable form, composed of eight thousand districts, and an unstable type.

The discrepancy in the information concerning the two types suggests that over a certain period of time the boundaries of the *ru* had shifted, and it is thought that this reflects a clear transformation of the character of the *ru* system from that of a military organization to that of an administrative district.

2. The *ru* system as it appears in old Tibetan documents originating in Central Asia.

A large number of old Tibetan documents have been recovered from the remains of the Tu fan fortresses of Mīrān I, a site of in the Lob region, and from Mazār Tāgh near Khotan. According to these sources, the Tu fan forces were dispersed to various destinations in the field according to the *ru*, and it appears that the district of a thousand was the basic unit of the *ru*. However, the smallest unit of four soldiers was formed without regard to membership in a district of a thousand. In other words, it can be surmised that the Tu fan soldier was conscripted from central Tibet and dispatched to defend the frontier regions, and it appears that the district of a thousand was no more than a unit designating his origin.